

シアターキノ 23周年記念作品ををご紹介します。



チャン・イーモウ監督×コン・リー、「紅いコーリャン」「秋菊の物語」「活きる」等で中国映画の新しい歴史を生み出した伝説のタッグが8年ぶりに復活。それぞれに豊かなキャリアと人生を重ねてきて、原点に帰り、奥深い人間ドラマの傑作を完成させました。文化大革命に引き裂かれて20年、再会した妻は夫の記憶だけを失くしていた…最も切ない夫婦の愛の物語です。

チャン・イーモウ監督は、原作のゲリン・ヤンの小説を初めて読んだとき、「大きな衝撃を受けました」と語る。文化大革命で、工場や農場での強制労働に就いたイーモウ監督にとって、小説に描かれていた社会背景や人物は、熟知しているものばかりだった。そのため、ごく自然な流れで映画化を決意したのだという。しかし今の中国では、小説の内容すべてを映画化するのは不可能だった。「まだまだデリケートな問題なので映画にはできないのです。考えた末に監督は、小説のエピローグで描かれる、最後に帰るくだりを映画の始まりにして、小説全体の歴史的背景を、登場人物の細部とセリフに凝縮させることにした。「いわゆる“一滴から太陽が見える”という中国式美学で、控えめで含蓄のある映画作り」「私にとって本作は、若い頃の情熱と熟練した技術の両方を動員して挑んだ作品です。観客の皆さんがこの物語を心に刻み、その裏側にある感情を忘れないでくれる事を願っています」と。

コン・リーが演じた記憶喪失の妻は、大きなチャレンジで、撮影前に病院と老人ホームで実際に生活し、この病気を思ったひとたちの肉体と心理を体感、「この上なく素晴らしい役ですが、演じるのがとても難しい。不可能な任務に挑んでいるような、まったく新しい“コン・リー”を見せているような気持ちになりました。再びチャン・イーモウ監督と組んだことで、監督の作品がより深く成長し、さらなる困難なことに挑戦しているのだと確信しました。私はその挑戦を楽しみましたし、楽しんだからこそ、演技への情熱を感じることができたのです」。そして監督がリーとともに中国で最も優れている俳優と絶賛するチェン・ダオミンは「この映画は、歴史の悲しみに引きずられることのない素晴らしい作品です。観客に家族の再会と希望という、愛情を越えた何かをもたらしています」と語る。

キノのフェイスブックとは別に、代表の中島洋と、支配人中島ひろみが個人FBをやっています。公開映画の紹介や解説もあつたりしますので、よろしければ友達申請をしてください。なお、お名前だけでは承認の判断ができませんので、メッセージでも「キノ会員です」「キノでよく映画を見ています」など、一言ご連絡をお願いします。



世界が注目する天才監督グザヴィエ・ドラン、カンヌ国際映画祭審査員賞受賞作品。本当の意味での成長と解放を願って息子を一人の人間として想う“強さ”、そんな母の生き方を、たとえ信頼を置いた友人にさえも理解されなかったとしても、気丈に振る舞いながら、社会に対する敗北を背負い、揺れるカーテンの影で泣いている姿に、母親のしんの強さを垣間見る。「僕らが黙っているなら、母に大声で叫んでほしい」「僕らが間違っているなら、母には正しくあってほしい」「何があろうと、最後の決断を下すのは常に母であるべきなんだ」「僕は母が戦いに勝つところを見たい」。25歳、グザヴィエ・ドランが捉える、全世界共通の母の強さ、愛について。



カンヌから始まった熱狂のパレードはヨーロッパからアメリカへ、年齢や国籍に関係なく見る人すべてを虜にしているのは、なんといっても初めて映画化が実現した知られざる実話であること、それも本作のプロデューサーが最初にこの事実を耳にした時、「本当にあったことだなんて、信じられない」とその驚きを保証する物語なのだ。80年代イギリス、不況と闘うウェールズの炭鉱労働者に手を差し伸べたのは、ロンドンのきらびやかなLGSMの若者たちだった。質実剛健の片田舎の肉体労働者と、ハデなファッションの同性愛者、誰から見ても水と油、両極端の2つのグループが困難を乗り越え、手を取り合って未来を切り開く姿がユーモアに満ちた温かい視線で描かれる感動作。



88年「さよなら子供たち」、98年「ライフ・イズ・ビューティフル」、11年「サラの鍵」、子どもたちはいつだって懸命に生きている。「アーティスト」でアカデミー賞5冠に輝いたアザナヴィシウス監督がどうしても描きたかった、今もどこかで起きている戦争に、どんなに踏み潰されても懸命に生きていく、立場の異なる人々の“それでも生きたい”という願いを9歳の少年ハジを中心に描き切った衝撃の感動作。

言葉では伝えられない 過酷な現実にひそむ 人間の〈真実〉が、
口をきかない少年ハジの 沈黙から伝わってくる。

—— 谷川俊太郎(詩人)

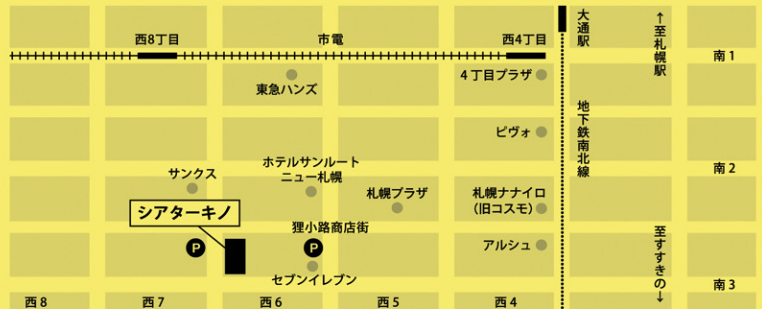


今号のごあいさつ

まもなく桜の花が咲き、コートも脱いで身体も軽く、春到来！一番うれしい季節ですね。シアターキノは今年7月で23周年、記念作品第1弾は「バードマン あるいは(無知がもたらす予期せぬ奇跡)」、この号が出るころには上映中です。アカデミー賞ではめでたく作品賞・監督賞・脚本賞・撮影賞という主要4部門を受賞、受賞発表の日はいチャリトゥ監督はじめスタッフ・キャストの皆さんにとって生涯最高の日になったことでしょう。ステージに上がった主要スタッフのほとんどが監督と同じようにメキシコからアメリカにやってきた映画の仲間たちでした。イチャリトゥ監督は「この賞を同胞であるメキシコ人に捧げたい。彼らにふさわしい政府ができること、アメリカに住むメキシコ人への公平な扱いを受けることも願っています。この偉大な移民国家はそうして成長してきたのですから」と心に残るスピーチをされました。全てを失った男がもう一度愛されたいと願う気持ち、新たな一歩を踏み出そうと躍起になり、やっとたどり着いたのは…ラストで娘がみせる表情に全てが詰まっています。人間がもっている最高の宝物“想像力”、その素晴らしいさに賭けた映画人たちの情熱、こんなに観る者を信頼した映画を見たことがありません。大きな愛に、気持ちよく羽ばたいてみたい。

支配人 中島ひろみ

2015年度 キノ会員募集中！ 締切:5月31日(日)まで
ご利用期間:2015年4月1日～2016年3月31日
ピンテージ・スタンダード・シニア・学生会員 詳しくは専用チラシをご覧ください。



THEATER KINO 札幌市中央区狸小路6丁目南3条グランドビル2F
TEL 011 231 9355
www.theaterkino.net / webmaster@theaterkino.net